子どもの生活体験等に関する調査研究

――子どもの生活体験・遊びの変遷と発達上、危惧される問題点を探る――

（分担研究：学習・遊びと子どもの健康に関する研究）

小田　豊

要約：子どもの生活・自然・文化・情緒・遊び等の実態を把握し、子どもの生活体験・遊びにおける問題点を明らかにするための調査をした結果、「家庭や地域社会での子どもの役割は無くならないまでも、親自身も実質的には子どもの手助けを必要としなくなった」傾向が一般的生活体験に見られる特徴があった。また、子どもの遊びの衰弱、弱体化と呼べる現象は顕著ではなかったが、「一人での遊びと友だちとの遊び」では「友だちとの遊びが楽しい」が55.8%と半数を越えているが、「半分半分」と答えた子どもが21.1%あったり、「家の中での遊びと外での遊び」においても、家の外派が40.1%、家の内派13.8%であったが、「半分半分」の中間派が46.3%を占め、「半分半分」と答えている意味内容を検討していく必要が示唆された。

見出し語：遊び・学習・生活体験・文化的体験・情緒的体験・自然体験

研究意図：ここ十数年の社会の生産構造の急激な変化は、子どもを取り巻く状況と子ども自身の人間関係をも含めて、質的に大きな変化をもたらしてきた。遊び・労働・学習とあらゆる領域で変化の指摘がなされている。

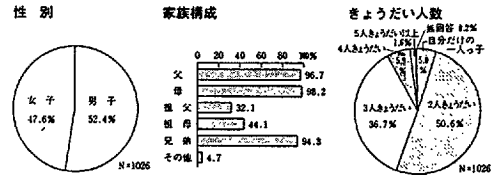
かつて、子どもたちが家事労働や家庭の生産活動に携わっている姿は、ごくあたりまえの風景であったが、今ではほとんど見かけなくなっている。しかし、家事労働などに関わらなくなっただけ子どもが遊びに打ち込めるようになったかというと、子どもの遊びはむしろ年々貧弱になっていることが数多く指摘されるようになってきた。さらに、高度に情報化された現代の生活は、あらゆることを疑似体験することができ、子どもたちの生活が屋内に移る傾向にある。これらのことは、子どもたちの直接体験を狭め、自らの体験によって得られる真の理解や本当の感動は得難く、心身の発達にかげりをみせ、無感動・無関心・無意欲な子どもたちを増加させる傾向になっていくのではないかという危惧を感じさせる。

そこで本年度は、子どもたちは、日頃どのような体験をしているのか、低学年から高学年への移行期として生活の幅を広げていっているであろう小学４年生を対象に、生活・自然・文化・情緒・遊び等の体験の実態を把握し、子どもの生活体験・遊びにおいて、真の問題点は何かを明らかにするための基礎資料を得ることを目的とした。

調査内容：①一般生活体験②自然体験③文化的体験④情緒的体験⑤遊びの体験⑥我慢強さ⑦自己像、

調査の設計：①調査地域－滋賀県全域②調査対象－小学校４年生③標本数－1、026人（標本母数　17,131人）④調査方法－学校へ配布・留置調査⑤調査期間－1992年-1993年

調査対象・属性：

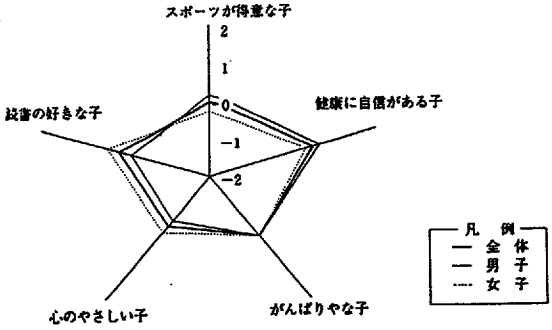


＊滋賀大学教育学部幼児教育研究室
(Dept.of Child Education,Faculty of Education,Shiga Univ.)

調査結果の概要：

・平均ポイントとは、回数件数に得点を与え、回答者総数で割った平均点である。したがって、ポイントが高くなるほど体験が多く、低くなるほど体験が少ないことを意味する。

(1)自己像



(2)遊びの体験

	項　　目	平均ポイント 全体（男子，女子）
	おにのいる遊び	2.09(2.06, 2.13)
	ごっこ遊び	0.81(0.53, 1.24)
	物を作る遊び	2.03(2.20, 1.84)
	公園や広場での遊び	1.85(1.82, 1.87)
	2～3人でする遊び	2.03(2.17, 1.87)
	おおぜいでする遊び	1.89(2.18, 1.57)
	木登り、魚や虫つかみ、花つみなどの遊び	1.81(1.87, 1.73)
	家の中でする遊び	2.21(2.24, 2.17)
	マンガを書いたりお話を作ったりする遊び	1.31(1.21, 1.42)
	自転車乗り	2.58(2.65, 2.49)
	ゲームセンターでの遊び	1.28(1.50, 1.03)
	テレビゲーム機での遊び	1.98(2.44, 1.47)

(3)文化的体験

	項　　目	平均ポイント 全体（男子，女子）
現代的機器	電卓で計算をしたこと	1.92(2.07, 1.75)
	ワープロやパソコンを使ったこと	1.35(1.47, 1.23)
	ビデオを自分でセットして見たこと	2.10(2.32, 1.85)
	1人で電車やバスに乗ったこと	0.89(1.01, 0.75)
芸術的な体験	音楽コンサートへ行ったこと	0.95(0.83, 1.09)
	劇場へ行ったこと	1.27(1.23, 1.31)
	映画館へ行ったこと	1.93(2.06, 1.79)
	美術館へ行ったこと	1.54(1.59, 1.49)

(4)一般的生活体験

	項　　目	平均ポイント 全体（男子，女子）
衣生活に関すること	とれたボタンをつけたこと	0.42(0.20, 0.66)
	手でハンカチや下着を洗ったこと	0.74(0.52, 0.99)
	せんたく物をタンスにしまったこと	1.70(1.34, 2.10)
食生活に関すること	目玉やきを作ったこと	1.57(1.44, 1.72)
	1人でごはんをたいたこと	0.48(0.35, 0.63)
	インスタントラーメンを作ったこと	1.95(2.09, 1.80)
基本的な生活習慣に関すること	自分でかみの毛を洗ったこと	2.83(2.81, 2.86)
	自分でツメを切ったこと	2.61(2.54, 2.69)
	自分で運動ぐつを洗ったこと	1.90(1.68, 2.14)
	ふとんやベッドの整理をしたこと	1.81(1.60, 2.03)
	机の上や中の整理をしたこと	2.36(2.20, 2.53)
手伝いや仕事に関すること	夕食の材料を1人で買いに行ったこと	1.20(1.14, 1.26)
	夕食後1人で食器を全部洗ったこと	1.15(0.79, 1.54)
	家のそうじをしたこと	1.96(1.81, 2.12)
	家の窓ガラスふきをしたこと	1.62(1.53, 1.73)
技能に関すること	リンゴの皮をむいたこと	1.32(1.09, 1.57)
	カナヅチでクギを打ったこと	2.02(2.33, 1.68)
	電池をとりかえたこと	2.24(2.55, 1.90)

(5)自然体験

	項　　目	平均ポイント 全体（男子，女子）
川や海での体験に関すること	魚つりや魚をあみでつかんだり、手でつかみをしたこと	1.89(2.28, 1.42)
	ボートや小さな舟に乗って遊んだこと	0.96(1.09, 0.82)
	水に向かって石を投げ、水きりをしたこと	2.09(2.43, 1.72)
	川や海で泳いだこと	2.19(2.25, 2.13)
	日焼けして背中や肩の皮がむけたこと	0.98(1.09, 0.87)
山での体験	高い山の頂上まで、歩いて登ったこと	0.85(0.92, 0.78)
	谷川の水やわき水を飲んだこと	1.13(1.23, 1.02)
野原での体験に関すること	木の実や野草をとって食べたこと	1.05(1.09, 1.00)
	木にのぼったこと	1.78(2.05, 1.48)
	カエルをつかんだりさわったりしたこと	1.46(1.99, 0.88)
	セミ・トンボなどのこん虫をつかんだこと	2.15(2.48, 1.80)
	草花をつんで遊んだこと	1.66(1.11, 2.25)
共同生活	野外でテントの中で寝たこと	0.90(0.98, 0.82)
	飯ごうでごはんをたいて食べたこと	0.90(0.95, 0.85)
自然現象に関すること	日の出を見たこと	1.07(1.21, 0.92)
	夕日を見たこと	2.41(2.44, 2.37)
	虹を見たこと	2.31(2.33, 2.29)
	流れ星を見たこと	0.77(0.87, 0.66)
	霜柱を見たこと	1.88(1.93, 1.83)
飼育栽培に関すること	クモがすを作っているのを見たこと	1.28(1.47, 1.07)
	タネをまいて植物を育てたこと	1.81(1.75, 1.86)
	魚やこん虫など、生き物を飼ったこと	2.04(2.16, 1.90)
その他	野外で虫に刺されて、はれたり、いたかったこと	1.64(1.75, 1.52)
	草むしりをしたこと	1.97(1.90, 2.05)
	はだしで外を歩いたこと	1.84(2.04, 1.62)
	動物園以外で、ニワトリを見たこと	2.06(2.14, 1.96)

調査結果の考察にかえて：

ここでは、本調査結果の概要から現在の子どものおかれている生活や遊び環境の変化と来年度の研究課題について述べてみたい。

(1)子どもを取りまく生活体験の変化

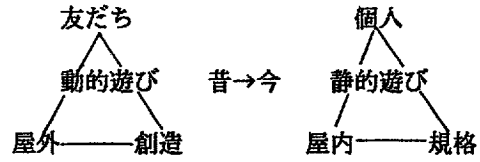
かつて、子どもたちが家事労働や家庭の生産活動にたずさわっている姿は、ごくあたりまえの風景でしたが、今ではほとんど見かけなくなった。しかし、家事労働などにかかわらなくなっただけ子どもが遊びを含めた自然体験・生活体験などに打ち込めるようになったかというと、それらは、むしろ年々貧弱になっているという指摘が数多くなされている。本調査においても、衣生活体験「とれたボタンをつけたこと」では、「１回もない」「１－３回」の未体験派に属すると考えられる子どもたちは90％にのぼり、「せんたくきを使わず、ハンカチや下着を洗ったこと」も未体験派が80％に達している。食生活に関する体験をみると、「１人でごはんをたいたこと」への未体験派が80％台と高い比率を示し、逆に「インスタントラーメンを作ったこと」の体験派は60％台と高くなっている。また、ヴァイオリンやピアノは弾きこなせても、ナイフで鉛筆を削ったり、リンゴの皮を剝いたりすることができない、あるいは靴のヒモを結んだりできない子どもが現れてきているが、本調査においても「リンゴの皮をむいたこと」への未体験派は60％台であった。

また、基本的生活習慣に関しては、「自分でかみの毛を洗ったこと」「自分でツメを切ったこと」など自分自身の身体についての見える部分の体験ポイントは非常に高くなっているが、「自分で運動グツを洗ったこと」「ふとんやベッドの整理をしたこと」など見えにくい部分への体験はあまり高いとはいえないことである。

自然体験において日常的かどうかはともかくとして、子どもたちは「夕日を見たこと」「セミ・トンボなどの昆虫をつかんだこと」「川や海で泳いだこと」などは比較的多くのを体験している。しかし、「クモが巣を作っているのを見たこと」「流れ星を見たこと」「霜柱を見たこと」など自然現象そのものについては未体験派が60％を超えている。また、情緒的体験において「赤ちゃんをおぶったこと」「近所のおさない子の世話をしたこと」「家族が病気やけがをした時、世話をしたこと」などは未体験派が60％台、70％台となっており、先に述べたように家庭や地域での人間関係を伴う体験から子どもたちは確実に遠ざけられていることを示している。

(2)子どもの遊び環境の変化

最近の子どもは遊ばなくなったというものの、子どもたちが遊んでいると言っている時間は、本調査においても以前とそれほど違ってはいない。子ども自身は遊んでいると思っている。ただ、遊びの質に変化が起きているため、大人たちのイメージにある遊びではなくなっているのかもしれない。それを表すが、次の図である。



この変化は、豊かな遊びを手に入れる方向での変化とはいえない。特に仲間集団を必要としない遊びの成立、つまり自然発生的子ども集団の衰退は、子どもの発達にかかわる重大な変化が示唆されるかもしれない。

家族の中だけで生活していた子どもが家を出て、最初に出会う同輩他者の世界が仲間集団である。子どもは、はじめて家族の庇護を離れて他者と交わる。そこで各家庭で習得された行動様式がぶつかり合い、試され、修正され、それによって子どもの視野は広がり、社会化が促されていく。そのことは、仲間集団の構造的特質に負うところが大きいのである。

ところが本調査の中に、仲間集団から個人へ、屋外から屋内への移行など先の図を現すような結果を確実に見ることができる。例えば、「一人での遊びと友だちとの遊びでは」は「友だちとの遊びが楽しい」が55.8％と半数を超えているが、「半分半分」と答えた子どもたちが21.1％あることである。また、「家の中での遊びと外での遊びでは」においても、”家の外派”が40.1％と”家の内派”13.8％を上回っているものの、「半分半分」の中間派が46.3％になっている。さらに、夢中になって取り組んだ体験では、「ある」が78.1％と多数を占めているのであるが、その体験内容では、「屋内遊び」が48.1％と最も多くなっていることである。

この結果は、子どもたちの遊びの衰弱、弱体化と呼べる現象が起きてきていることまでは分からないが、子どもと仲間集団の関係が、「遊びの変容」にともなって悪循環の様相を見せはじめていることは示唆される。

この点について来年度は、高度に情報化された環境や生活との関係から考えてみたい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:子どもの生活・自然・文化・情緒・遊び等の実態を把握し、子どもの生活体験・遊びにおける問題点を明らかにするための調査をした結果、「家庭や地域社会での子どもの役割は無くならないまでも、親自身も実質的には子どもの手助けを必要としなくなった」傾国が一般的生活体験に見られる特徴があった。また、子どもの遊びの衰弱、弱体化と呼べる現象は顕著ではなかったが、「一人での遊びと友だちとの遊び」では「友だちとの遊びが楽しい」が 55.8%と半数を越えているが、「半分半分」と答えた子どもが 21.1%あったり、「家の中での遊びと外での遊び」においても、家の外派が 40.1%、家の内派 13.8%であったが、「半分半分」の中間派が 46.3%を占め、「半分半分」と答えている意味内容を検討していく必要が示唆された。